

# Newsletter of Japanese Coral Reef Society

No.27 [2005 / 2006 No.2]

## contents

	page
新任のご挨拶	2
連載1:サンゴ礁に暮らす人々 -19-	2
日本サンゴ礁学会第8回大会および 公開野外観察(フィールドトリップ)のご案内	3-6
NPO紹介 [NPO 海の自然研究所]	7
オーストラリアサンゴ礁学会第81回 ＜参加報告＞	7
連載2:若手会員の眼 -22-	8
連載3:サンゴ礁関連施設探訪 -13- [WWFジャパンサンゴ礁保護研究センター]	8

## 会告

### 2005/2006年度総会の開催について

日本サンゴ礁学会2005/2006年度総会を、  
下記の通り開催いたします。会員の皆様は、ご出席下さい。  
なお、総会に出席できない方は、本ニュースレターに同封いたしました委任  
状にご記名・捺印の上、郵送またはファックスにて事務局まで11月21日  
までお送りくださるか、出席する会員に託して当日事務局の  
手元に届くようにして下さいようお願いいたします。

日本サンゴ礁学会会長 小西 健二

#### <事務局>

茅根 創

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻

FAX: 03-3814-6358

- 日時:2005年11月26日(土) 16時30分～17時30分
- 場所:琉球大学(西原町)千原キャンパス内大会会館
- 議事(案):  
2005-2007年度評議委員の紹介  
2004/2005年度会計報告、2005/2006年度予算計画  
各委員会報告・活動計画など

## 新任のご挨拶

小西 健二



### <略歴>

- 1951年に東京大学地質学科卒業後、米国留学を経て、1960年に東京大学助手、金沢大学講師として着任。琉球大学での研究活動後、金沢大学教授(1968年)、カリフォルニア大学客員教授(1969年)を歴任し、現在(金沢大学名誉教授)に至る。
- 国内に留まらず、数多くの国際学術調査・会議に参画し、サンゴ礁における地球科学的研究を中心に、幅広い分野で業績を残す。
- 2001年に当学会副会長を経て、2005年より当学会会長に就任。

山里清前会長を継ぎ、今期会長を務めるものとして一言ご挨拶致します。創立以来、日本における初の開催を目途に専念した第10回国際サンゴ礁シンポジウム(ICRS)は、行動指針に「危機にある世界のサンゴ礁の保全と再生に関する沖縄宣言」を採択、会員・会友をはじめ多くの皆様のご尽力で、好評裡に昨夏無事終え、同期に環境省と当会の共同作業で上梓された「日本のサンゴ礁」も、既に、改訂版への着手が提言されています。

ちなみに、米国のフォート・ローレンデイル(フロリダ)で開催予定の、次期会議のテーマは「サンゴ礁の未来」です。

そして今、学会活動の次なる目標を設定すべく、改めて、私達の身边を熟視する時、多様化するサンゴ礁研究には、柔軟で学際―複合的な取組をする必要を痛切に思います。研究の質の向上と財政基盤の保持には、関連学会間の共催・連合とともに、民官学の連帯の更なる強化が必要で、触媒として本学会の負う責任の重さを感じます。既に他学会などですすめられている、機関をこえた研究者育成も次世代のサンゴ礁研究者の確保への緊急課題の一つでしょう。本年7月より2年間はパラオ共和国と日本(環境省)の両国政府が共同で国際サンゴ礁イニシアティブ(ICRI)の事務局を引受けることになり、当学会も、この活動を積極的に支援することはご承知の通りですが、このような国際協力事業の実践のなかから、新たな研究者集団の育つことが大いに期待されます。

上記の構想を背景に、専門委員会ならびに評議員会の組織と構成が改まり、学会は新たな歩みをはじめることとなりました。国際連携と賞の新委員会の設置、企画委員会と保全委員会の再編成による強化、学会誌・ニュースレター編集の電子媒体化へ向けての増補/省力化、広報活動の多面/迅速化と

国際化(学会ホームページの活用)などから着手される予定です。なお、研究を目的とした組織は、当面、委員会というよりはグループとし、できるだけアドホック\*にして、学会の総会時期などにとらわれずに、専門課題や必要に応じて、随時立ち上げて頂ければと存じます。

折も折、今秋の学術大会総会の後、サンゴ礁学の先駆的指導者として内外に高名な、故川口四郎先生のご業績を偲ぶ記念講演会とその後の懇親会で、ご令息川口昭彦御夫妻列席のもと、高弟の上島孝久岡山大学名誉教授と同学の日高道雄琉球大学教授の講演、生前ご垂教頂いた会員諸兄姉からの想い出話、往時のお写真の展示などが予定されています。専攻の如何を問わず多数のご参加を、お願い致します。先生の偉業を範に、地球温暖化の進む亜熱帯域、北西太平洋でサンゴ礁の保全・再生に努める私達の行動を、深化・活性化できればと念じます。

最後に、諸委員会委員、研究グループのメンバーをはじめ、会員・会友各位に、何卒山里前会長同様の、ご支援、ご協力をお願いし、ご挨拶とさせていただきます。皆様からのご提言、ご意見を歓迎し、お待ち申し上げます。

\*アドホック(ad hoc): 特定の目的のための; 当面の問題に限る

## 連載 1 サンゴ礁に暮らす人々 -19-

### 山のマラエ

慶應大学名誉教授 近森 正



ウンボコさんは顔がちょっとばかり重そうな、でも、とてもチャーミングな女性だった。四十才くらいだろうか。右腕から手の甲には首長の権威をあらわす波の模様に入れ墨が彫ってある。彼女の正式な名前は、ウンボコチニ・マリエ・パ・アリキ。今から七百年くらい前、はじめて、ここラトング島に到来し、島の東側を支配することになったという首長タンギアの子孫にあたる。

礁原から聞こえてくる潮騒が止んで、山の方から涼しい風が吹いて来た。ブーゲンビリアの花のむこうに見える稜線はひととき美しい。島をとりまく沖積平野がいくつもの深い谷間に吸い込まれ、標高六百メートルに達する山並みに向かって険阻に立ち上がっている。

「十五隻のカヌーを率いてラトング島の東岸に着いたタンギアは、上陸すると、そこに神々を祀る神殿(マラエ)テ・ミロミロを建てた。」彼女は自らの系譜の始まりを語りはじめた。「それから小さなカヌーとアヴァイキ(原郷の地)から持ってきたサンゴの石を携えて、アヴァナ川をさかのぼり、島の中央の山、テ・コウに登った。カヌーの中には二尾の魚を入れていき、死火山の火口にある池にそれらを放った。そして頂の見えるところにサンゴの石で神殿を建てた。」

「あの山がテ・コウ。谷あいから山頂を見渡せるこの場所が、私のお城なのよ。」そう云って、彼女はほお笑んだ。その笑顔には部族の歴史を背負った首長の風格があった。

私たちは、どうしても山のマラエを探したかった。渓谷をさかのぼり、崖を登りつめ、ようやく、細い尾根の上にひとつのマラエを発見した。それがタンギアの建てたものであるかどうかはわからない。発掘の結果、玄武岩といっしょにいくつものサンゴ石灰石が使われていることが判明した。重い石をなぜ、こんなに高いところまで運び上げて来たのだろう。遺跡からはテ・コウ、テ・アツクラ、テ・マンガの山々が指呼の間にある。足下の深い谷間のはるか向こうにはサンゴ礁の海が光っている。

山から流れ出す川の水は海に注ぎ、雲になってふたたび雨滴となって山に戻ってくる。山と海の間には精気がかよいあう。古代のポリネシア人は自然の循環のなかにすみかを求めたのだ。海の魚やサンゴを山の上に運び上げる行為は、それを身体で体験することではなかったのか。人々は尾根と尾根との間の集水域ごとに、タペレと呼ばれる社会をつくりだしたのである。

図:ウンボコ首長と山のマラエ(遺跡番号RAR105)ツランギ渓谷の上流2.5キロ左岸、急峻で狭い尾根上にある。4x4.5m。ラトング島のマラエとしてはかなり小さい。ほぼ方形の範囲に九つの立石と80以上の石で構築されている。このうちサンゴ石やビーチロックは19を数える。ラトング島は周囲に裾礁をめぐらす火山起原のいわゆる高い島。(スケッチ:近森)





# 第8回大会 および 公開野外観察会 (フィールドトリップ)

のご案内

2005年11月25日(金)～27日(日)

琉球大学大学会館 (千原キャンパス)

(大会情報 日本サンゴ礁学会: <http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/>)

日本サンゴ礁学会第8回大会を2005年11月25日(金)～27日(日)に開催いたします。25～26日は琉球大学の大学会館におきまして研究発表会を行い、27日は沖縄本島南部の知念半島におきまして野外観察会(フィールドトリップ)を行います。多くの皆様のお越しをお待ちしております。

第8回大会実行委員長 藤村弘行

## スケジュール

### 11月25日(金)

- 10:00 受付開始(大学会館)
- 13:00～20:00 口頭発表(大学会館3F)

### 11月26日(土)

- 9:00～12:00 ポスター発表(大学会館1F)
- 13:30～16:30 口頭発表(大学会館3F)
- 16:30～17:30 総会
- 17:30～18:00 名誉会員の表彰、学会賞の授与
- 18:00～19:00 川口四郎先生記念講演会(入場無料)
- 19:00～21:30 懇親会(中央食堂)

### 11月27日(日)

- 9:00～16:00 野外観察会(フィールドトリップ)

※ニュースレター26号に記載したスケジュールから変更がありますので、ご確認ください。



## 会場への交通

### ●那覇バスターミナルから琉球大学(40～50分)

- 2番ホームから98番で琉大北口終点下車、徒歩10分
- 4番ホームから97番で琉大東口下車、徒歩10分
- 高速バスで琉大入口下車、徒歩15分

### ●空港から琉球大学(30～40分)

- 高速バス3番乗り場から113番、123番、5番乗り場から111番で琉大入口下車、徒歩15分

### ●空港从那覇バスターミナル(10～15分)

- モノレールで旭橋駅下車、徒歩1分
- 路線バス2番乗り場から13番、124番、125番で、那覇バスターミナル下車

※国際通り周辺にご宿泊の皆様は、国際通り沿いの市外線バス停から98番、97番にご乗車ください。



## 日本サンゴ礁学会第8回大会 公開野外観察会 (フィールドトリップ)

主催: 日本サンゴ礁学会第8回大会  
協力: 知念村教育委員会

### 「陸になったサンゴ礁: 人・生物・自然の成り立ち」

・沖縄本島知念半島一帯の隆起サンゴ礁、湧水と史跡を巡る・

### ●案内役

堀信行(首都大学東京)・河名俊男(琉大)・渡久地健((財)沖縄協会)・中井達郎(国士館大)・田場由美雄(沖縄県立芸大)

### ●実施日時

2005年11月27日(日) 9:00～16:00

### ●観察行程

パレット久茂地(8:10発)→琉大北口(9:00)→斎場御嶽手前→斎場御嶽→知念城趾→(昼食)→垣花樋川→受水走水→港川フィッシャー(港川人発掘遺跡)→琉大北口(15:50頃)→パレット久茂地(16:30着予定)

### ●主な観察場所とみどころ

斎場御嶽手前: 地形地質・離水サンゴ礁の観察  
斎場御嶽: 信仰・石灰岩生態系・地形地質  
知念城趾: 信仰・歴史  
垣花樋川: 生活・地形地質  
受水走水: 信仰・地形地質  
港川フィッシャー(港川人発掘遺跡): 人類史・地形地質

### ●参加費

無料(ただし交通費は実費となる場合があります。今後の案内にご注意下さい)

### ●集合場所と時間

朝8:00までにパレット久茂地前または8:50までに琉大北口構内の信号付近に集合ください。係の者が看板を持って立っています。

### ●昼食

昼食はお弁当を各自で持参ください。大会に参加される方は26日に受付(大学会館)でお弁当の注文を承りますので、ご希望の方はお申し込みください。

### ●公開観察会に関するお問い合わせ先

中野義勝(琉大): [yknssk@lab.u-ryukyu.ac.jp](mailto:yknssk@lab.u-ryukyu.ac.jp)

### 【昼食】

25日は中央食堂、北食堂および大学生協(中央食堂2F)のお弁当をご利用ください。

26日は中央食堂をご利用ください。

27日の昼食は前日にお弁当の注文を承ります。ご希望の方は前日の26日に受付でお申し込みください。

# 大会 PROGRAM

## 口頭発表

11月25日(金)			
講演番号	講演時間	タイトル	発表者氏名
<b>1-1</b>	13:00	太陽光をより得られる方向へ群体の骨格を成長させるリュウキュウキッカサンゴ	○岩瀬晃啓(琉球大・理工・海洋環境)・Yimnang Golbuu(Palau International Coral Reef Center)・Robert van Woessik(Department of Biological Sciences, Florida Institute of Technology)・酒井一彦(琉球大・熱帯生物圏研究センター)
<b>1-2</b>	13:15	塊状ハマサンゴ類他の病気一特にPUWS様白斑について	○山城秀之(名桜大)
<b>1-3</b>	13:30	Relationship Between Zooxanthellae Abundance and Pigment Concentration and Seasonal Variation in Two Coral Species,	○KESHAVMURTHY Shashank and KIMIO Fukami (Graduate School of Kuroshio Science)
<b>1-4</b>	13:45	Fish and crustaceans associated with cnidarians: why are they not stung by the host?	○Michael Arvedlund (TBRC, Sesoko station, Univ. of the Ryukyus)
<b>1-5</b>	14:00	クマノミ類と共生する大型イソギンチャク類の分子系統解析	○磯村尚子(琉球大・院・理工)・服田昌之(お茶大・湾岸セ)・日高道雄(琉球大・理・生物)
<b>1-6</b>	14:15	オニヒトデ集団解析にむけての多型分子マーカーの開発とその特徴	○安田仁奈(東工大)・長井敏・浜口昌巳(瀬戸内水研)・練春蘭(東大アジアセ)・瀬岡和夫(東工大)
<b>1-7</b>	14:45	石垣島宮良河川口域堆積物中のカドミウム濃度について	○阿部和雄(西海区水産研究所石垣支所)
<b>1-8</b>	15:00	沖縄島南部沿岸環境に及ぼす富栄養地下水の影響(予報)	○中西康博(東京農大)・高平兼司・平良栄彦(沖縄県公衆衛生協会)・奥田夏樹(名桜大学)
<b>1-9</b>	15:15	サンゴ-褐虫藻による硝酸態窒素の利用	○田中泰章・宮島利宏・小池勲夫・小川浩史(東大海洋研)・林原毅(西海区水研石垣)
<b>1-10</b>	15:30	Benthic primary production and nitrogen fixation in fringing coral reefs	○CASARETO, B. E. (LASC, Shizuoka Univ.)・Suzuki, Y. (Shizuoka Univ.)・Charpy, L. (IRD)・Kurosawa, K. (LASC)・Ishikawa, Y.(Shizuoka Univ.)
<b>1-11</b>	15:45	Linkage between organic flow and microecosystem in coral reef	○Yoshimi SUZUKI (Shizuoka Univ.)・Beatriz CASARETO (Shizuoka Univ., LASC)・Loic Charpy・Jean BLANCHOLT (IRD)・Yoshio ISHIKAWA (Shizuoka Univ.)・Hiroyuki FUJIMURA (Ryukyu Univ.)・Takuji ITOU (Mitsubishi Corporation)
<b>1-12</b>	16:00	水中水生生物生産呼吸測定装置によるサンゴ礁生物群集の生産速度の推定法	○立田穰(電中研環境研)・向江奈穂・若林真千子(東京医薬)・岩尾研二(AMSL)
<b>1-13</b>	16:30	石西礁湖自然再生計画のための海水流動および熱・物質輸送数値シミュレーション	田村仁(地球環境フロンティア研究センター)・○瀬岡和夫(東工大・院・情報理工)・鈴木庸一(JR東日本)・宮澤泰正(地球環境フロンティア研究センター)
<b>1-14</b>	16:45	超分解能フォーキャストマルチビーム測深システムで得られた海底地形図とサンゴ分布の比較	○古島靖夫・山本啓之・丸山正((独)海洋研究開発機構)・山村祐仁・今永俊一・大八木敏夫・半谷和祐((株)東陽テクノカ)
<b>1-15</b>	17:00	強光によるサンゴ幼生の着生阻害について	○鈴木豪(京大院・農)・林原毅・加藤雅也・玉城泉也・伏屋玲子(西水研・石垣)・林勇夫(京大院・農)
<b>1-16</b>	17:15	ミドリイシ幼生は変態時、変態阻害物質を分泌する	○矢島麻美子・片桐優子・服田昌之(お茶大・沿岸セ)
<b>1-17</b>	17:30	大型サンゴ幼生飼育槽の中でのプラヌラ幼生の生残率と鉛直分布の変化	大森 信(阿嘉島臨海研究所)・柴田早苗((株)テトラ)・横川雅恵(日本大学生物資源科学部)・青田 徹((株)テトラ)・○岩尾研二(阿嘉島臨海研究所)
<b>1-18</b>	17:45	伸縮性素材を用いたサンゴ移植片の固定法	○西平守孝(名桜大学総合研究所)
<b>1-19</b>	18:15	移植した <i>Acropora formosa</i> 断片の繁殖生態	○大久保奈弥(東工大・生命理工・分子生命情報)・大森 信(阿嘉島臨海研究所)・本川達雄(東工大・生命理工・生体システム)
<b>1-20</b>	18:30	石垣港における移植サンゴの成長について	竹田 哲・○前川 進(沖縄総合事務局 開発建設部)・土井 博・山口 誠・前里 尚(沖縄総合事務局 石垣港湾事務所)・藤原秀一(国土環境(株))
<b>1-21</b>	18:45	那覇西道路建設に伴うソフトコーラルの移植とモニタリング	石渡一義・松川剛・目取真正樹(沖縄総合事務局)・下地博明・与那嶺和史・川田文彦(沖縄総合事務局南部国道事務所)・○山城篤・大城哲・伊藤馨司(株式会社沖縄環境分析センター)
<b>1-22</b>	19:00	サンゴ元気でみんな元気? -環境問題から、より身近な健康問題へ-	○鈴木泰英((株)シーンズ 環境教育事業部)
<b>1-23</b>	19:15	泡瀬干潟の環境特性と保護活動	○目崎茂和(南山大学)・開発法子(日本自然保護協会)・泡瀬干潟自然環境調査委員会
<b>1-24</b>	19:30	慶良間諸島海域におけるサンゴ礁保全交渉に関する一考察	○藤澤宜広(沖縄大学法経学部)
<b>1-25</b>	19:45	インドネシアにおける沿岸資源管理の課題と対策	○鹿熊信一郎(亜熱帯総合研究所)

11月26日(土)			
講演番号	講演時間	タイトル	発表者氏名
<b>2-1</b>	13:30	造礁サンゴの形態とL関数	○中森亨・中村隆志・栗原 正臣(東北大学大学院理学研究科)
<b>2-2</b>	13:45	瀬底島周辺におけるサンゴ被度の変遷: 25 年を振り返る	○酒井 一彦(琉球大学・熱帯生物圏研究センター)・向 草世香(九州大学・理・数理生物)
<b>2-3</b>	14:00	沖縄におけるサンゴモ食期オニヒトデの分布および終年変化	○小笠原敬・長田智史・小澤宏之(沖縄科)・鹿熊信一郎(亜熱研)・横地洋之(東海大)
<b>2-4</b>	14:15	石西礁湖「シモビシ」海中公園のサンゴ礁と海藻	○大葉英雄(海洋大・科学部)・木村匡・下池和幸(自然研)・鈴木淳・長尾正之(産総研)・鳥取海峰(岡山大・地理)・岩瀬晃啓・森本直子(琉大・熱帯セ)・澁野拓郎・高田宜武(西海区水研・石垣)
<b>2-5</b>	14:30	サンゴが生産・分泌する有機物の微生物群集に対する増殖基質としての役割	○深見公雄・的場洋右・Keshavmurthy Shashank・岩瀬文人(高知大院黒潮圏)
<b>2-6</b>	14:45	海草藻場の拡大とサンゴ場の縮小は何を意味するのか? -与論島北東部礁池での環境変化-	○中井達郎(国土館大)
<b>2-7</b>	15:00	宮古列島から採取したビーチロックの <sup>14</sup> C年代と安定同位体比	○小元久仁夫(日本大学)
<b>2-8</b>	15:15	アングマン諸島における2004年地震に伴うサンゴ礁の離水	○茅根 創・池田安隆・越後智雄(東京大・理)・穴倉正展・鎌滝孝信(産総研・活断層研究センター)
<b>2-9</b>	15:30	琉球列島中南部における津波と台風の高波による海食崖の剥離と石灰質岩塊の移動-1771年明和津波、1832年台風、および1951年ルース台風を例にして-	○河名俊男(琉球大学)・正木 譲(元石垣島地方気象台)・宮城邦昌(南大東島地方気象台)・島袋永夫(沖縄プランニング)・島袋綾野(石垣市市史編集課)・伊達 望(別府市南立石1区1-8)・神山 英(石垣市立平真小学校)・比嘉 淳(琉球大学・院)
<b>2-10</b>	15:45	北琉球・馬毛島における北限域サンゴ礁の形成過程	○菅 浩伸(岡山大)・中島洋典(有明高専)・大橋倫也・濱中 望・岡本健裕(岡山大・院)・中井達郎(国土館大)・堀 信行(首都大学東京)
<b>2-11</b>	16:00	環礁州島の地形発達と集落の成立	○近森 正(慶応義塾大学・帝京平成大学)

## ポスター発表

11月26日(土) 9:00 ~ 12:00			
講演番号	タイトル	発表者氏名	
P-1	キクメイシサンゴ類の交雑と分類に関する研究	○深見裕伸(京都大学瀬戸臨海実験所)	

<b>P-2</b>	マメスナギンチャクの種間における形態学的及び遺伝学的比較	○岩間敦(鹿児島大・院・生命機能)・小野修介(都城東高)・James D Reimer(JAMSTEC)・塚原潤三(鹿児島大・理・生命化学)
<b>P-3</b>	アザミサンゴの2タイプ及び交雑の可能性について	○安部真理子・萩原隼人(琉球大学・理工学研究科・海洋環境学専攻)・早川英毅・渡辺俊樹(東京大学・海洋研究所・海洋生命科学部門)・日高道雄(琉球大学・理学部・海洋自然)
<b>P-4</b>	アザミサンゴにおけるマイクロサテライトマーカーの開発	○鈴木悠太・武島弘彦・西田睦・渡邊俊樹(東京大学海洋研究所)・西川 昭・酒井一彦(琉球大・瀬底)
<b>P-5</b>	サンゴと褐虫藻の共生に関する遺伝子の解析	○湯山育子・宇都宮嘉宏(東大海洋研)・丸山正(海洋研究開発機構)・渡辺俊樹(東大海洋研)
<b>P-6</b>	褐虫藻とイシサンゴ由来c DNAの判別法の検討	○紀井晋一・田中次郎(東京海洋大)・丸山 正(海洋研究開発機構)・湯山育子・早川英毅・渡邊俊樹(東大海洋研)
<b>P-7</b>	ミドリイシの受精の分子機構に関する研究(予報)	○井口亮・David Miller(Comparative Genomics Centre, James Cook University)
<b>P-8</b>	<i>Porites Compressa</i> の過形成組織に特異的なタンパク質の検出	○中山亜紀(京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻)・Cheryl Woodley・Mats Lundqvist(DOC/NOAA/NOS/NCCOS, Center for Coastal Environmental Health and Biomolecular Research, Hollings Marine Laboratory)
<b>P-9</b>	サンゴのピテロジェニン:卵タンパク質の前駆体構造	○早川英毅(東京大学 海洋研究所)・安藤 忠(水産総合研究センター 北海道区水産研究所)・中野義勝(琉球大学 熱帯生物圏研究センター 瀬底実験所)・渡邊俊樹(東京大学 海洋研究所)
<b>P-10</b>	ミドリイシサンゴの初期発生	○大久保奈弥(東京工業大学生命理工学研究科分子生命情報専攻)・山上晋(東京工業大学生命理工学研究科生体システム専攻)・本川達雄(東京工業大学生命理工学研究科生体システム専攻)
<b>P-11</b>	ミドリイシ属サンゴ幼生の変態と褐虫藻獲得過程の形態学的観察	○広瀬慎美子(琉大・理工・21世紀COE)・山本広美・野中正法(沖縄美ら海水族館)
<b>P-12</b>	サンゴの幼生の定着に関わる機能形態学的検討	○中野義勝(琉球大学)・原政子・渡辺俊樹(東京大学)・浪崎直子(琉球大学)
<b>P-13</b>	異なる褐虫藻株が稚サンゴの成長に及ぼす影響の比較	○宇都宮嘉宏・湯山育子・渡辺俊樹(東大海洋研)・丸山正(海洋研究開発機構)
<b>P-14</b>	様々な褐虫藻を感染させたトゲスギミドリイシ一次ポリプの成長と生存率	○樋口陽子(琉球大学理学部海洋自然科学)・山本広美・野中正法(沖縄美ら海水族館)・日高道雄(琉球大学理学部海洋自然科学)
<b>P-15</b>	ニオウミドリイシのプラヌラ幼生による褐虫藻獲得の選択性	○面川雄一郎(琉大・理工・海洋自然)・広瀬慎美子(琉大・理工・COE)・日高道雄(琉大・理・海洋自然)
<b>P-16</b>	Study of bleaching mechanisms using coral cell aggregates (サンゴの細胞凝集塊を用いた白化機構の研究)	○Badrun Nesa・Michio Hidaka(Department of Chemistry, Biology and Marine Science, University of the Ryukyus)
<b>P-17</b>	サンゴ骨格内に生息する微細藻類がホストサンゴの光合成に与える影響	○山崎征太郎・中村 崇(琉球大学遺伝子実験センター)・山崎 秀雄(琉球大学理学部)
<b>P-18</b>	光強度の揺らぎがコユビミドリイシにおける光合成に及ぼす影響	○中村 崇・山崎 秀雄(琉球大学理学部)
<b>P-19</b>	<i>Pavona</i> 属サンゴ2種の褐虫藻遺伝子型と生理学的性質の季節変動	○諏訪僚太(琉球大・院・理工)・廣瀬慎美子(琉球大・理工・COE)・日高道雄(琉球大・理・海洋自然)
<b>P-20</b>	石垣島浦底湾におけるサンゴ光合成収支の季節変動	○阿部 寧・高田宜武・笠野拓郎・橋本和正(西海区水産研究所)
<b>P-21</b>	ミドリイシ属における腫瘍状構造の病理学的特性	○入川暁之(琉球大学大学院理工学研究科)・日高道雄(琉球大学理学部海洋自然科学科)
<b>P-22</b>	沖縄の塊状ハマサンゴ類に出現する腫瘍のタイプ分けの検討	○安田直子(琉球大・理工・海洋自然科学)・中野義勝(琉球大・熱帯生物圏研究センター)・山城秀之(名桜大・国際・観光産業)・日高道雄(琉球大・理・海洋自然)
<b>P-23</b>	ハマサンゴ <i>Porites australiensis</i> の繁殖生態	○浪崎直子(琉大院・理工)・Andrew.J.Heyward(AIMS)・酒井一彦(琉大熱帯生物圏研究センター)
<b>P-24</b>	高知県大月町西泊におけるサンゴの産卵について	○目崎拓真・岩瀬文人・中地シュウ・林徹(黒潮生物研究所)
<b>P-25</b>	石垣島白保におけるアオサンゴの幼生放出、加入、群集形成	○茅根 創(東京大・理)・波利井佐紀(クインズランド大)
<b>P-26</b>	Larval dispersal tendency of spawning acroporid corals	○Yoko Nozawa(Yokatsu High-school)・Peter Harrison(Southern Cross University)
<b>P-27</b>	四国西南海域における造礁サンゴの分布と幼生加入	○別所学(東海大学)・横地洋之(東海大学海洋研究所)・黒潮生物研究所
<b>P-28</b>	沖縄本島サンゴ礁域におけるミドリイシ類サンゴの復元過程の差—定着後初期サンゴの野外での生存率—	○部奈 千晶(琉球大学・理工学研究科)・野中正法・山本 広美(沖縄美ら海水族館)
<b>P-29</b>	沖縄海岸海中公園地区内のサンゴ群集と水中景観	○西平守孝(名桜大学総合研究所)
<b>P-30</b>	石西礁湖及び周辺域への稚サンゴの加入状況	○野島 哲(九大・理院・臨海)・岡本峰雄(東京海洋大)・上野光弘・下池和幸・木村 匡(自然環境研究センター)
<b>P-31</b>	2005年における石西礁湖の台風被害	○野島 哲(九大・理院・臨海)・岡本峰雄(東京海洋大)・上野光弘(自然環境研究センター)
<b>P-32</b>	沖縄島周辺海域におけるトゲサンゴ( <i>Seriatopora hystrix</i> )の分布	○長田智史・小笠原敬・山川英治(沖縄科)・上野大輔(広島大学生物圏科学研究科)・小澤宏之(沖縄科)・酒井一彦(琉球大学熱帯生物圏研究センター)
<b>P-33</b>	海洋博公園地先における造礁サンゴ群集の遷移	○野中正法・山本広美(沖縄美ら海水族館)・門田健一(国営沖縄記念公園事務所)
<b>P-34</b>	桜島大正溶岩潮下帯に生息する刺胞動物群集への高海水温度の影響	○小野修助(都城東高校)・James Davis Reimer(JAMSTEC)・塚原潤三(鹿児島大理学部)
<b>P-35</b>	オニヒトデに対する薬剤駆除報告	○横井仁志(NPO法人沖縄県ダイビング安全対策協議会)・小菅恵雄・小菅陽子((株)アイシテル)
<b>P-36</b>	ミドリイシ幼若体を用いた海洋汚染物質の影響評価	○渡辺俊樹・早川英毅・湯山育子・鈴木悠太・宇都宮嘉宏(東大海洋研)・紀井晋一(東京海洋大)・安村茂樹(WWF ジャパン)
<b>P-37</b>	駿河湾のエダミドリイシ群集に対するガンガゼの食害防止フェンスの効果	○岸本太郎(東海大・海洋・院)・権田泰之(木曾興業(株))・松永育之((株)東海アクアノート)・上野信平(東海大・海洋)
<b>P-38</b>	小型TVカメラロボット(ROV)による琉球列島サンゴ礁の調査と映像データベースの構築	○宮城 博・砂川貴之・岸良武文・比嘉利カ・古島靖夫・山本啓之・園田 朗・小松徹史・設楽文朗(国際海洋環境情報センター/株式会社マリン・ワーク・ジャパン)
<b>P-39</b>	駿河湾の衰退したエダミドリイシ群集へのマガキガイの加入	○中島 匠(東海大・海洋・院)・上野信平(東海大・海洋)
<b>P-40</b>	西表島浦内河川口マングローブにおけるキバウミミナメの分布と環境	○福岡雅史(東海大・海洋・院)・上野信平(東海大・海洋)・河野裕美(東海大沖縄地域研究センター)
<b>P-41</b>	データベース解析によるハブクラゲ発生源海域の推定	○大見謝辰男(沖縄県衛生環境研究所・衛生動物室)
<b>P-42</b>	泡瀬干潟のサンゴ礁環境マップの作成	○長谷川均・後藤智哉(国士館大学)・目崎茂和(南山大学)・泡瀬干潟自然環境調査委員会・(財)日本自然保護協会
<b>P-43</b>	定点カメラを用いたサンゴ成長過程の長期間モニタリング	○戸田真志(公立はこだて未来大学)・秋田純一(金沢大学)・中野義勝(琉球大学)・森山徹・木村健一(公立はこだて未来大学)
<b>P-44</b>	港湾におけるサンゴの健康診断調査と技術開発調査手法	○竹田 哲・前川 進・比嘉静秀・鈴木真也(沖縄総合事務局・開発建設部)・高橋由浩・長倉敏郎(財団法人 港湾空間高度化環境研究センター)・岩村俊平(株式会社 エコー)
<b>P-45</b>	リーフチェックの結果から見た紀伊半島のサンゴ群集のダメージ	○土川 仁・池田 慎也・富弥 充・高木 裕(コーラル・ネットワーク)
<b>P-46</b>	野外大型トラップを用いた造礁サンゴ配偶子の確保	○岩尾研二(阿嘉島臨海研究所)・綿貫 啓・青田 徹((株)テトラ)・谷口洋基・田村 實・大森 信(阿嘉島臨海研究所)
<b>P-47</b>	無節サンゴモの着生促進による造礁サンゴの着生技術に関する現地試験	○山本克則(鹿島建設)・渡邊晋也・迫田恵三・上野信平(東海大)
<b>P-48</b>	サンゴ幼生の中間育成水槽内での基盤への着生実験	○柴田早苗・青田 徹(株式会社テトラ)・綿貫 啓(前・株式会社テトラ)・岩尾研二・田村 實・大森 信(阿嘉島臨海研究所)
<b>P-49</b>	チロシンキナーゼ阻害剤によるサンゴ幼生の着生・変態阻害	○谷口洋基(阿嘉島臨海研究所)



<b>P-50</b>	垂下式筏を使用したミドリイシ属サンゴの中間育成について	○林 徹 (財団法人黒潮生物研究財団黒潮生物研究所)
<b>P-51</b>	サンゴ礁の早期回復に向けた取り組み	○長田紀晃・臼田昱太・三好朗弘・口ノ町誠・青田 徹・柴田早苗 (株式会社テトラ)
<b>P-52</b>	有性生殖を利用した造礁サンゴ群集の大規模修復技術の開発 4. 2005年の幼生放流野外実験の結果とその後の経過	○林原 毅 (西水研・石垣)・鈴木 豪 (京大院・農)・玉城泉也・伏屋玲子・加藤雅也 (西水研・石垣)
<b>P-53</b>	陸上サンゴ養殖への新たな取り組みー(株) Aqua Culture Okinawaの紹介	○佐藤崇範・平良栄康 ((株) Aqua Culture Okinawa)
<b>P-54</b>	「研究」の現場と「社会・教育」の現場を連結する仕組み作り -NPO 海の自然史研究所 Marine Learning Center の設立と活動の展望	○藤田喜久・今宮則子・伊勢戸 徹・平井和也・中野義勝
<b>P-55</b>	宮古島の湧水に生息する甲殻類相とその保全ー地下水環境, 生物, そして人との繋がりー	○藤田喜久 (琉大・非常勤講師/NPO 海の自然史研究所)・池田広志 (琉大・院・理工)・翁長 均 (琉大・院・理工)・伊藤 茜 (琉大・医)・川原 剛 ((株) 九州メディカル)・諸喜田茂充 (琉球大学大学院)
<b>P-56</b>	パラオ国際サンゴ礁センターのサンゴ礁保全における役割と課題	○行平英基 (パラオ国際サンゴ礁センター)
<b>P-57</b>	三重県東紀州のサンゴ生息海域における水質	○岩崎誠二 (三重大学生物資源学研究所)
<b>P-58</b>	サンゴ骨格の酸素・炭素同位体比の成長速度依存性について	○鈴木 淳 (産業技術総合研究所)・小俣珠乃 (海洋研究開発機構)・川幡穂高 (東京大学海洋研究所/産業技術総合研究所)・日比野浩平 (自然環境研究センター)・岩瀬晃啓 (琉球大学大学院)
<b>P-59</b>	サンゴ年輪の酸素同位体比と蛍光分析の比較	○中村修子・茅根 創・飯嶋寛子・山形俊男 (東京大・理)
<b>P-60</b>	可視・近赤外線によるサンゴの活性モニタリング手法の開発	○斉藤 宏 (東京海洋大学)
<b>P-61</b>	衛星リモートセンシングによる奄美大島のサンゴ礁底質マッピング	○作野裕司 (广大)・山野博哉・松永恒雄 (国環研)
<b>P-62</b>	Large-Scale Habitat Classification of Palauan Reefs-Use of Textural Methods in Conjunction with Spectral Analysis to Improve Reef Classification.	○D. Idip・H. Kayanne (University of Tokyo)・H. Yamano (Institut de Recherche pour le Developpement)・T. Matsunaga・H. Shimazaki (National Institute for Environmental Studies)
<b>P-63</b>	GPS を取り付けた2連気球によるサンゴ礁海藻草場の撮影	○加藤健・大谷謙仁・根岸明・野崎健・山室真澄 (産業技術総合研究所)・宮本孝之 (長菱設計 (株))
<b>P-64</b>	サンゴ礁海域の炭酸ガス分圧測定装置の校正方法	○飯村葉子・加藤 健・根岸 明・野崎 健・天野雅継・嘉藤 徹 (産総研)・渡邊 敦 (名大)・茅根 創 (東大)
<b>P-65</b>	サンゴ礁形成の地球化学的モデル	○中村隆志 (東北大・院・理)・中森亨 (東北大・院・理)
<b>P-66</b>	過酸化水素によるサンゴ代謝への影響	○樋口富彦・藤村弘行・伊古田博嗣 (琉球大・理工)・新垣雄光・大森保 (琉球大・理)
<b>P-67</b>	大型有孔虫ー微細藻共生系の有機・無機炭素生産量の測定	○藤田和彦 (琉球大・理・物質地球科学)・藤村弘行 (琉球大・理工・COE)
<b>P-68</b>	低温・常圧下における炭酸塩溶解実験	○山本将史・茅根創 (東大)・野崎健・根岸明・加藤健・(産業総合研究所)・渡邊敦 (名古屋大)
<b>P-69</b>	生物地球化学的手法により算出した石垣島伊原間サンゴ礁の炭酸カルシウム生産量	○本郷宙軌・茅根 創・齋藤智慧 (東京大学大学院・理学系研究科・地球惑星科学専攻)・井手陽一 (海洋プランニング株式会社)
<b>P-70</b>	マジュロ環礁ローラ島に見られるサンゴ礁州島堆積相	○安河内實・茅根創 (東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻)・山口徹 (慶應義塾大学文学部民族考古学研究室)・山野博哉 (国立環境研究所, UR 128 CoReUs, Institut de Recherche pour le Developpement)
<b>P-71</b>	那覇市の沿岸海域および国場川、安里川の堆積物ーその起源と人為的影響ー	○与那那寛寛・藤田和彦 (琉球大・理・物質地球科学)
<b>P-72</b>	漫湖底質の堆積速度と重金属等の経年変化	○棚原 朗 (琉球大学機器分析センター)・黒澤健太郎・池田隆志 (琉球大学理学部)・金城 嘉哉 (株式会社イー・エー・シー)
<b>P-73</b>	石垣島轟川流域における赤土流出特性に関する長期連続観測解析	○山本高大・灘岡和夫・Enrico Paringit(東工大)
<b>P-74</b>	石垣島 白保と宮良における群集代謝の比較	○齋藤智慧・茅根 創 (東京大・院・理学系・地球惑星科学)・岩出卓也 (東京大・理・地学)・渡邊 敦 (名古屋大・院・環境学・21世紀COE)・所 立樹 (東京大・院・理学系・地球惑星科学)・灘岡和夫 (東京工業大・院・情報理工学・情報環境学)
<b>P-75</b>	沖縄県瀬底島サンゴ礁域における群集代謝量のモデル解析	○桑野多恵子 (琉球大・院理工)・藤村弘行 (琉球大・理工・COE)・中野義勝 (琉球大・熱生圏・瀬底)・大森保 (琉球大・理)
<b>P-76</b>	レユニオン島及び沖縄におけるサンゴ礁の光合成活性について	○石川義朗・塩井祐三 (静岡大学)・藤村弘行 (琉球大学)・ベアトリス・E. カサレト (水圏科学コンサルタント)・鈴木款 (静岡大学)・伊藤卓司 (三菱商事 (株)・社会・環境室)
<b>P-77</b>	レユニオン島サンゴ礁群集代謝量のボックスモデルによる見積もり	○藤村弘行・桑野多恵子 (琉球大・院・理工)・大森 保 (琉球大・理)・石川義朗 (静岡大)・B. E. Casareto(Shizuoka Univ. / LASC)・鈴木 款 (静岡大)・J. Blanchot・L.Charpay(IRD)

## 発表について

- 口頭発表の講演時間は質疑応答を含めて一人15分です。11分で1鈴、13分で2鈴、15分で3鈴を鳴らします。
- 発表機材は液晶プロジェクターとOHPを用意いたします。液晶プロジェクターによる講演ではWindows XP (PowerPoint 2003)とMacOS X (PowerPoint 2004、Keynote2)のコンピューターを用意します。

ターを用意します。ファイルの受付とプレビューは11/25の午前中と11/26日の午前中に受付で行います。受付可能なメディアはCD-RまたはUSBメモリです。ファイル名は講演番号(半角数字:プログラム参照)に続けて講演者の姓としてください。個人のコンピューターも使用できますが、不測の事態に備えてOHPシートもご用意ください。

- ポスター発表はパネルの大きさが約180cm(縦)×90cm(横)です。この範囲に収まるように各自各自

由にポスターの大きさを設定ください。発表会場は大学会館1Fです。ポスターは26日の9:00までに各自の講演番号が表示されているパネルに張り(前日の午後から張り出せるようになります)、12:00まで掲示してください(画鋏・セロテープ等はこちらで用意します)。講演時間は最低1時間とし、各自で発表する時間帯を設定してください(講演時間を表示する用紙を用意いたします)。

## 川口四郎先生

### 記念講演会のお知らせ

日本サンゴ礁学会第8回大会におきまして、故川口四郎先生の記念講演会を開催いたします。川口四郎先生はサンゴ礁生物学の分野で先駆的な研究を行い、多数の業績をあげられましたが、昨年2004年12月15日に逝去されました。本大会では、川口先生のサンゴ研究のご業績を記念して、先生のお人柄や世界に先駆けて行われたサンゴ研究についてお話いただきます。

■ 場所: 琉球大学大学会館 3階ホール ■ 日時: 18:00~19:00 (入場無料)

#### < ご講演の内容 >

- 山里 清先生 (前日本サンゴ礁学会会長): 川口先生のエピソード -1-
- 上島孝久先生 (岡山大学名誉教授/現・中国学園大学教授): 川口先生のエピソード -2-
- 日高道雄先生 (琉球大学): 川口先生のサンゴ研究
- 小西健二先生 (金沢大学/日本サンゴ礁学会会長): お礼の言葉・感謝状の贈呈

また、学会期間中は川口四郎先生のご活躍当時の写真などを会場の一画に展示いたします。そちらもあわせてご覧ください。

## NPO 紹介

## NPO 海の自然史研究所 Marine Learning Center

NPO 海の自然史研究所 藤田喜久

NPO 海の自然史研究所  
Marine Learning Center  
とは？

NPO 海の自然史研究所 Marine Learning Center (以下、海の自然史研究所) は、海の研究者と環境教育の実践者、そして学校教育者が集まって設立した団体です。私たちは、各々の専門性に基いて共に活動することによって「研究の現場と教育の現場を連結する仕組み」を構築し科学的思考力を持った人材を育成することを目的としています。

私たちの事業は「研究事業」と「教育事業」を二本の柱としています。研究事業は、海洋生物の種多様性情報の収集と管理、海の文化誌研究、市民調査に対する研究支援等を専門の研究員が国内外の関連機関とも協力して進めていきます。一方、教育事業としては、アメリカで開発された海洋科学教育プログラム「MARE」<http://www.lawrencehallofscience.org/MARE/> の日本での普及・運営・展開を中心として、様々な海の学習企画運営を進めていきます。なお「MARE」とは、カリフォルニア州立大学パークレー校ローレンスホール科学教育研究所で開発・運営が行われている海を科学的に学ぶための専門科学教育プログラムです。海の自然史研究所は、この「MARE」の日本での普及拠点となるジャパン MARE センターとして活動を認められています。私たちは、この両事業を同時に進めることによって、教育に「生きた科学」を取り入れるための新たな活動形態を具現化していきたいと考えています。

## 【マリンラボキャンプの実施】

海の自然史研究所の教育事業企画として 2005 年 9 月 17 日 -19 日の 3 日間、琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底実験所をお借りして、海の科学体験キャンプ「マリンラボキャンプ」を実施しました。統一コンセプトとして「科学的な考え方を身につける」を掲げ、以下のプログラムを実施しました。

- (1) アイスブレイク - 人間観察 -
- (2) 施設見学 - 研究の現場を見る -
- (3) 形態観察のテクニックを学ぶ - カニ類のスケッチと種同定 -
- (4) MARE activity 「グレートプランクトンレース Great Plankton Race」
- (5) MARE activity 「シャークエンカウンター Shark Encounter」
- (6) 潮間帯を切り取る - トランセクト調査 -
- (7) プランクトンの採取と観察
- (8) 海の不思議を見つけるスノーケリング自然観察
- (9) まとめ - 研究計画立ててみよう！ -

参加者は、最終的に 8 人でしたが (直前に 3 名が不参加になり少し寂しくなりましたが ...)、ホテルのエコツアースタッフ、ダイバー、ミュージシャン



(I)、大学生、高校生と様々な分野からの参加をいただきました。今回のキャンプでは、朝早くから夜遅くまでほとんど息をつく暇もないほどみっちりプログラムを組みましたが、参加者の集中を切らすことのないよう室内作業、講義、野外活動をバランスよく配置するよう工夫したこともあり、かなり濃密で充実した時間を過ごしていただけたと思っています (スタッフにとっても体力的に厳しいキャンプでした ...)。実際、参加者のキャンプへの評価は、かなり良好なものでした。今後、内容をより改善して、定期的に開催して行きたいと考えています。

文末になりましたが、このマリンラボキャンプの実施には、社団法人 沖縄建設弘済会による助成を受けました。ここに記して深謝します。

## 連絡先

私たちの活動に興味のある方は、以下の連絡先までお気軽にご連絡ください。まだ活動を開始したばかりの「若い」組織ですが、理念を持って進めています。正会員・賛助会員の募集も行っておりますので、ご考慮のほど宜しくお願い致します。

NPO 海の自然史研究所 Marine Learning Center (法人設立申請中)

〒904-0113 沖縄県中頭郡北谷町宮城 2-95-101

Tel: 098-800-8016 Fax: 098-800-8017

e-mail: info@marinelearning.org URL: <http://www.marinelearning.org/>

オーストラリアサンゴ礁学会  
第 81 回大会

開催期間: 2005 年 8 月 19-22 日

## 参加報告

佐藤 博雄 (東京海洋大学 海洋科学部) e-mail: h-satoh@s.kaiyodai.ac.jp  
波利井佐紀 (The University of Queensland) e-mail: s.harii@uq.edu.au

上記大会は、グレートバリアリーフ (GBR) にあるクイーンズランド大学ヘロン島臨海研究所 (Heron Island Research Station) にて開催された。研究所とリゾートホテルしかない周囲 2km 程度この小さい島に、オーストラリア国内外より学識研究者・学生・行政関係者ら約 100 名が訪れた。日本からは、我々と琉球大学院生 諏訪太さんの 3 名が参加した。

この島は大陸からフェリーで約 2 時間離れており、参加者は島に缶詰にされたせいか、会場は盛況であった。オーストラリアは、南北 2000km におよぶ GBR と最近注目を浴びている西オーストラリアサンゴ礁の 2 つの広

大なサンゴ礁を保有するため、その保全・管理を中心に、世界で起こっているサンゴ礁生態系の危機とその再生に向けた熱心な討論が朝から晩まで続けられた (夜は、大量に配られるビール・ワインつき!)。特別講演では、クイ

ンズランド大学 Prof. Ove Hough-Guldberg が「2050 年のサンゴ礁の行方」について、半世紀後にサンゴ礁海域がどうなっているかという世界の大問題を CO<sub>2</sub> ガス排出や温暖化状況を踏まえ大胆に予測し、我々が取るべき社会的行動まで言及した提言がなされ、日本の科学者はそこまで踏み込んだアドバイスを行政側にできるだろうか、と痛感させられた。また、シドニー大学 Prof. Tony Larkum の特別講演「分子生物学から見たサンゴの白化」では、サンゴに共生している褐虫藻の光合成を懇切丁寧に教授して戴いた。

本大会で日本人は、「石西礁湖におけるサンゴ群集の光合成・呼吸特性 (佐藤他)」、「サンゴ幼生の分散に関わる脂質組成変動 (波利井他)」の口頭発表と、「シコロサンゴ 2 種のストレス耐性と褐虫藻の遺伝子型 (諏訪他)」のポスター発表を行い、海外研究者との議論・交流を深めた。

艇庫で開催されたレセプションでは、シーフードブッフェを楽しみながら、若手研究奨励賞などの受賞が行われた他、サンゴ礁生態学に多大な貢献をされた Dr. Vicki Harriott (2005 年 3 月 3 日に永眠) を追悼し、その功績

が紹介された。余談ではあるが、レセプションの最後には会場全体がダンスパーティーの場となり、陽気なオーストラリア人ならではの展開となった。

エクスカッションも充実しており、ダイビングやスノーケリングツアーの他、ヘロン島の近くにある One Tree 島への 1 泊ツアーも開催された。この島はヘロン島よりも一回り小さく、シドニー大学臨海研究所がある。島は良く保全されており、周辺海域も含め大自然を満喫することができる。夜、満天の星を見ながらのバーベキューは格別であった。

本大会は年間 1 回開催される。今回は、より多くの日本人が参加することを熱望する。

写真左: ダイビングツアー (後者がヘロン島)  
写真右: レセプション (シーフードブッフェ)

## 《次回大会予定》

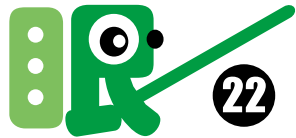
2006 年 8 月  
Mission Beach にて  
(Townsville より車で 2 時間程度)

詳細: オーストラリアサンゴ礁学会  
<http://www.australiancoralreefsociety.org/>



## 連載 2

### 若手会員の



A young member's eye

琉球大学 理工学研究科 海洋環境学専攻  
村井・酒井研究室  
博士課程後期 1年 森本 直子

こんにちは。私は琉球大学の村井・酒井研 D1 の森本直子と申します。私の研究室は、先号で最終回となった「瀬底日記」の舞台、沖縄本島北部の瀬底島にあります。修士の入学以来ずっと「年齢不詳」を買っている私が、「若手」なんておこがましいのですが、その辺は御容赦下さい！

私は、人為活動による水質変化がサンゴに及ぼす影響について、研究しています。大学では主に水環境を学び、数年その関係の仕事に携わり、未熟ながらも、その角度からの沖縄のサンゴ礁研究の重要性を感じています。とは言っても、現実には沖縄における研究は意外と進んでおらず、まずは基本的水質項目で四苦八苦している段階なのですが！

私の研究の根源は、「大好きな沖縄の綺麗なサンゴ礁の海で泳ぎたい」というとても単純な願いです。沖縄では、広範囲の白化といった大スケールの話で

はなく、河口域における赤土の流出や水質など、サンゴ礁が衰退する要因がいくつか挙げられると思います。今は眼前の研究からですが、行く行くは複雑な生態系の機構を紐解き、地域レベルで解決可能なたくさん問題に対する改善策を提案し、推し進めたいと思っています。

ここで酒井研について紹介しましょう。この研究室は、主に進化生態学をベースに、サンゴと魚、ウミウシを研究する学生から構成されています。今年のサンゴ班は、ポスドクを含め 9 名で、年々大所帯になってきました。研究内容は遺伝交流や繁殖生態などで、沖縄本島から西表島まで様々な場所で、多彩で個性的な面々が日々研究に明け暮れています！昨年からは某企業の顧問の方が、研究生としてバリバリ潜って調査をされています。毎月更新される彼のデスクトップのお孫さんの写真は、私の密かな楽しみになっています。サンゴ班の 2/3 を占める女性陣は、野外調査が多いためか、外見によらず何でもこなせる、たくましく成長した強者揃いです（ごめんなさい！）一方で、生きたサンゴの幼生を扱う時には、必ずトロ～とした眼をして、「可愛い～」の言葉しか発せなくなる法則があるようです。研究材料のサンゴの呼称は、大抵「うちの子」。かく言う私も、サンゴとしては見かけが地味な塊状ハマサンゴを扱っているのですが、これを対象としている偶然同じ名前（直子）の 3 人が揃った折には、夜中まで妙に盛り上がります。このように、サンゴへの愛情に溢れた研究室で、私達を暖かく真剣に指導して下さいる酒井先生には、頭が下がります。

瀬底での生活は場所柄、不便なことが多いですが、慣れれば楽しいことが山積みです。心地よい波の音

と満天の星空のロマンチックな夜・・・とは無縁のパーベキューが夏によく催されます。春の大潮に企画される「浜下り」の夜には、山盛りのシャコガイやサザエ、お刺身などの御馳走が大食堂に並びます。サンゴの産卵シーズンには、深夜遅くまで、月明かりのもとで懐中電灯の小さな灯りを手にした人々がうごめき、異様な活気がみなぎります。一昨年の瀬底島での 4 年に一度のお祭り（豊年祭）では、エクアドルからの留学生が琉球舞踊を披露して・・・などなど。話題には事欠きません。今の時期は、ヤシガニも登場します（写真）。

こうして振り返ってみると、このような環境で好きなことの研究ができる私は、かなりの幸せ者かもしれません。改めて、先生や友達をはじめ、多くの方々に、心の底からお礼申し上げます。皆様も、ぜひ一度、瀬底を「体験」してみてください！



研究室 HP : <http://w1.nirai.ne.jp/chio/coral/>  
e-mail : [naoko\\_m\\_nifty.com](mailto:naoko_m_nifty.com)

## 連載 3

### サンゴ礁関連施設 深訪 INQUIRY -13-

WWFジャパンサンゴ礁保護研究センター  
しらほサンゴ村

センター職員：前川 聡



石垣島の東海岸に位置する白保は、アオサンゴ群落をはじめとして、多種多様なサンゴが見られることで有名ですが、唄や踊りなど芸能の盛んな村としても、その名を知られています。石垣空港に降り立ち、車を東に走らせると、20 分ほどで白保の集落につきます。アコウ、ガジュマル、ティゴの 3 本の木がならぶ白保小学校を過ぎたところで、海の方に向かう道を進むと、その突きあたりにサンゴ礁保護研究センター（しらほサンゴ村）があります。サンゴの

石垣と赤瓦の建物で、ピジターセンターとしても一般に無料開放されています。WWF ジャパン（財団法人世界自然保護基金ジャパン）が、白保の海を守りたいと想う大勢の人々から寄付や募金を募り、サンゴ礁保護研究センターを建設したのは 2000 年春のこと。現在、4 名の職員が働いています。

しらほサンゴ村の描く白保の将来像は、白保サンゴ礁が健全なかたちでのこること、そしてその中心的役割を果たすのが「地域の人」であることです。それは白保の人が昔から海からの恵みを受け、形は様々であれ海を守ってきたからです。しらほサンゴ村はそのために必要な調査を行い、情報を集め、人々に伝えるための様々な活動を行っています。

しらほサンゴ村は、白保の人たちが海とどのようにつきあってきたのか、昔そして今、どのような気持ちを抱いているのか、そのことが白保の文化や歴史にどのように関わってきているのかを聞き取りを行っています。その一部は「白保今昔展」として展示されています。ここでは、くらしと関わりの深い海藻や魚介類、サンゴ礁の地形を利用した伝統的な漁法など、科学的な情報とあわせて紹介しています。昨年、財団法人日本宝くじ協会より助成を受けて作成したドキュメンタリー DVD「海と生きる サンゴ礁とともに～石垣島・白保～」もご覧いただけます。

今後どのような「白保村」をつくり、そしてどのような海を残していきたいのか。しらほサンゴ村は、白保の人とともに考えるきっかけづくりに力を入れています。小中学校の総合的な学習を支援したり、白保の大人限定のシュノーケル教室を開催しています。おばあや若い世代とが、自然の食材を取り入れた料理を一緒に作る郷土料理研究会や、しらほサンゴ村を会場にして、地元の人がおのの自慢の産品

を販売する白保日曜市のコーディネートも、そのような活動の一環です。

白保の海はかつて「命つぎの海」、「魚わく海」と表されました。しかし、今では少しずつその様子をえています。昔から漁を行ってきた人は、大きな魚は獲れなくなったと言います。海藻や石灰岩が付着した死サンゴも目立つようになりました。昨今の沖縄ブームによって白保を訪れる観光客も増えており、グラスボートなどの遊覧ポイント周辺では傷ついたサンゴも多くみられます。また昨年は白保サンゴ礁のシンボルとも言えるアオサンゴ群落が、台風の強烈な波浪で運ばれたサンゴ礁によって覆われ、景観が大きく変わってしまうという現象がございました。被害のあった範囲は徐々に広がっています。白保の海が、いまだどのような状況なのか、変化が起きているとするなら、何が原因と考えられるのか。それを明らかにするために、外部研究者の協力も得ながら様々な環境調査も行っています。

海からの恩恵をいつまでも受け、そして白保が生き生きとした村であり続けるためには、海を利用するマナーとルールをみんなで作っていく必要があります。今年 7 月、海を想う白保の人々によって、「白保魚漁く海保全協議会」が立ち上がりました。しらほサンゴ村はその事務局をつとめており、会員やその他の人たちの意見と要望を集約し、協議の場を設定しています。観光や調査で白保を訪れる方々にもご協力いただき、心地の良い海づくりを目指していきたいと考えていますので、今後ともご指導、ご支援をお願いいたします。

URL : <http://www.wwf.or.jp/shiraho/>  
e-mail : [shiraho@wwf.or.jp](mailto:shiraho@wwf.or.jp)

## 編集後記 Edit postscript

右も左も解らない初の編集長でした。いろいろと不手際が多く申し訳ありませんでした。

ご助力頂きました方々に感謝いたします。

編集担当 鈴木倫太郎

JCRS  
Japanese Coral Reef Society  
2005年10月28日発行

日本サンゴ礁学会ニュースレター [2005 / 2006 No.2]  
Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.27

●編集・発行人／日本サンゴ礁学会広報委員会  
日比野浩平・安部真理子・木村匡・杉原薫・野崎健・藤村弘行・梅澤有・鈴木倫太郎・中井達郎・波利井佐紀・山野博哉・渡邊敦  
●発行所／日本サンゴ礁学会 ●事務局／茅根 創 <kayanne@eps.s.u-tokyo.ac.jp>  
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax: 03-3814-6358